
飛んでも、わいばん

殻史二五二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛んでも、わいばーん

【Nコード】

N9677X

【作者名】

殻史二五二

【あらすじ】

遅刻しそうになり、普段は通らない裏路地を疾走する高校生、
長谷川、睦^{はせがわむつみ}
彼は運悪く異世界に続く開いた穴へと落下してしまう。

空から落ちゆく最中に出会ったのは白いワイバーンのシロであった。

睦は異世界で生きていくために郵便配達業を始める。

飛竜と少年が紡ぐ言葉を超え種族を超えた異種族間の友情物語。

【不定期更新です】

渡る異世界、竜ばっかり

息を切らせながら、少年が裏路地を走ってゆく。

蜘蛛の巣が張っているこんな道を、普段ならば通ったりはしないのだが、電車に乗り遅れそうな今となっては、そんな悠長な事を気にしている余裕はない。

途中で何度もネコや犬が顔を覗かせ、構って欲しそうに少年を見つめる。だが視線の先にいる少年が慌てている様子に気付くと、ネコは道を譲り、犬は応援をするように吼える。

気遣ってくれる動物達にも構ってやれない申し訳なさから、急いでいるにも関わらず少年は手を上げて答えてしまう。本来の人の好きさが滲み出る動作だった。

(やつべ！ やべえ！ ただですら出席足りてねえのにい〜！)

少年が寝坊さえしなければ、もしくはもっと寝坊をして遅刻が確定していれば、未来は変えられていたかもしれない。だが、少年は遅刻寸前で目を覚ましてしまった。

当たり前だが、未来は変わらない。

それは一瞬の出来事だった。裏路地を抜ける手前……建物と建物の隙間からは人通りが見て取れる程の場所に差し掛かった時だった。次の瞬間、訪れたものは陽の温かみでも道を歩く人々の喧騒でも無いものに包まれる。

少年を襲ったのは一瞬の浮遊感と視界が陽の光から、見通せぬ闇へと変化だった。

こうして、少年はこの世界からその存在を消し去る事になる。

「なに？ なになになに！？ なんだよ！？ これえ！」

視界に広がるのは闇一色だ。少年は途中で完全にパニックに陥っていた。

感覚としては浮いていつているようでもあり、落下しているようでもある。

初めての無重力感にどうしていいかわからない。本来は平衡感覚を保つ為に必要な視覚ですら、暗闇に閉ざされて体がどこを向いているのかわからないのだ。

パニックにならない方がおかしい。

「ううわっ！ ああああ……っ！ 誰でもいいから助けてくれよっ！」

声の限りに叫ぶが、反響しない声は自分には聞き取り難いものだ。声は闇にただ吸い込まれて、その存在が消えてゆく。

長く感じるような気が狂いそうな空間も、唐突に終わりを告げた。

しかし、その終わりに待ち受けていたものは、絶対的な絶望感である。

見渡す限りの青空……だが、無重力感はまだに消えない。変わりに風がビュービューと音を立てては通り過ぎてゆく。

少年がようやく解放された場所は、地上からは遥か上空数千メートルの所だったのだ。

眼下に広がる青々とした深緑の大地を見て、少年の顔が恐怖に染まる。

「う……そお……。なん……」

口から漏れ出した声すらも上へと残し、風の音で耳には届かなかった。

少年にとつての唯一救いがあったといえ、体は地上に向けてうつ伏せの状態で落下していたことだろうか？ そのお陰で普通よりも落下スピードは落ちてはいる。しかし、それも地上に叩き付けられる時間を数秒だけ引き延ばしたに過ぎない。

「~~~~っ！」

叫ぼうにも風圧で口が閉じられず、強制的に肺へと空気を送られて胸が痛く感じる。それと同様に風圧は瞼を押し開けて、眼球へも圧力を掛けてきた。

少年が目を閉ざしたのは痛みか恐怖からか……

(俺……ここで死ぬんだ……なんで？ こんな所に……)

思考しようにも体は異様に冷えて、頭が回らなくなる。

体を感じるのは異様な寒さと、浮遊感だけだ。

その浮遊感もついには感じなくなる。

感じたのはポスツと軽い衝撃と寒さ、それと胸や顔に感じる温もりだけ……

(あれ？ あったかい？)

顔に当たるのは、暖かいザラつとした感触だった。硬いようで柔らかい……ただひとつわかったのは、これは地面以外の感触であると言っただけだ。

相変わらず風の音が耳に煩いが、風が吹く方向が違う事に気付く。

さつきまでは前から後ろに流れる風だったのだが、今は頭の上から吹いているようだ。その風も勢いが落ちている気がする。少年は思い切って目を開けてみる。目の前は白一色が広がり、驚いて白い床に手を着いて体を起して、今いる場所を確かめる。そしてようやく白い床の正体がわかった。

それは、おとぎばなしにでも出てきそうな竜の背中だった。広く感じるその背中に少年は乗っていたのだ。

背中感触から、少年の存在に気が付いたのだろう。竜は飛びながらもその長い首を器用に後ろへと向けて振り返った。尖った口とそこに並ぶ鋭い牙、そのあまりの恐ろしさに悲鳴を上げる。

「……………ひっ！ うわぁ……………っ！」

恐怖心から疑問を抱く前に思わず、立ち上がってしまった。飛んでいる足場の悪い竜の背中の上で……

少年の体が当然の如く風に押されて、体が後ろへと流されてゆく。気付けばまた空へと放り出される格好となっていた。

(あ……………だめだ……………)

なんて馬鹿な事をしたのか頭に後悔が過ぎるが、それも一瞬だけの事だ。

すぐに落ちて死ぬのも食われて死ぬのも、同じこと。むしろ、地面に叩き付けられて死んだ方がまだマシだと思えてしまった。

しかし、現実はそのなにかいものでは無い事を、少年は思い知る。全身が白い鱗に覆われた竜は、空中でUターンを決めると少年に向かつて、その巨体を向かわせてきたのだから。

その視線が明らかに自分を見据えている事を、少年は遠目ながら

もはつきりとわかった。

(……………ははっ……………結局は食われるのかよ……………)

グングンと近付き、大きくなってゆく竜の巨体……………その時、少年は自分が大きな誤解をしてる事を知った。

竜の体には手は無く。手の変わりに翼には鉤爪がついている事から、ドラゴンの竜ではなくファンタジー小説などに出てくるワイバーンと呼ばれる飛竜だったんだと。

そんな事に気付いたからといって、何かが変わる事などありはしない。

白いワイバーンは少年のすぐ傍まで来ていたのだから……………

ワイバーンは高速で少年へと迫ると、地上から十数メートルのギリギリで目標を違わずに、その尖った口に捕らえる事に成功した。そのまま、スピードを落としてゆっくりと近くの地上に降り立つと、地面へと顔を寄せて口を開いた。

「あ、あ……………たす、かったのか？ えっ？」

地面には服の襟首が伸びきった少年が地面にへたり込んでいた。呆然とする少年に向かって、鼻先を擦り寄せてくるワイバーン。

「もしかして……………助けってくれたのか？ おまえ……………？」
「キュウーイ！」

白いワイバーンはその巨体に似合わない可愛らしい声で、少年の問い掛けに答えるのだった。

名前と優しさ……

白いワイバーンと少年がじゃれ合っている。

ワイバーンは巨体だけあって、頭だけでも少年の胴体より大きい、それが少年を気遣いながら頭を擦りつけたり、少年に撫でられたりしている光景は異様の一言だといえよう。

最初はおっかなびつくりに触っていた少年も、害意が全く見えないうワイバーンにすっかり慣れて、角に触れたり魚のヒレにも見える耳を撫でたりしていると、ワイバーンはとても気持ち良さそうに目を細めた。

横に並んで生えている角の間を撫でられる事が、気持ち良いらしく喉の奥を猫のようにグルグルと鳴らして喜んでいようだ。

「それにしても……ここってどこだよ。なあ？」
「キユイ？」

ズボンに付いた土を払いながら地面から立ち上がると、周囲を見回して呟いた。

その声に、ワイバーンは少年の顔を見つめて、小さく首を傾げる。少年がいる場所は草原と表現するしか無い所だった。下草は短く周囲に見えるものといえば、遙か遠くに見える森のような場所と、さらに遠くに見える連なる山々……

日本では見た事も無い光景に、困ったように頭を搔く。

少年は意外と自分が動揺していない事に驚いた。それもそのはずだ。つい先程まで死の恐怖や生きたまま食べられる恐怖を感じていたのだ。

見知らぬ所にいるという恐怖よりも、今は生きているという喜び

の方が大きいだけだが、それでも、今の少年にとっては落ち着いて状況を考えられる事はありがたかった。

「……それにしてもよかったよ……俺マジで死ぬかと思ったもん。うっん、お前がいなかったら死んでただろうなあ」

あのまま落下を続けて地面に叩き付けられる自分を想像して、少年は体を震わせる。

少年はありがたと言つて、感謝を表すように、ワイバーンの首筋を優しく撫でる。

「そつだ。いつまでも名前無いの不便だな。おまえとかつて命の恩人には失礼だし……名前ないのか？」

「キユ？」

少年の問いかけに、ワイバーンは一声鳴いて、小さく首を横に降る。

「……もしかして、人の言葉わかるの？」

「キユーイ！」

今度は大きく首を縦に降る。その顔はどこと無く嬉しそうだ。

「……言葉がわかるなら立ち上がって、胸を張って見せて……」

少年は何かのゲームで見たワンシーン……、竜が雄雄しく翼を広げるシーンを思い出して、生でそれを見れたらと思い、お願いしてみた。

「キユ？ ……ギユ、ギユイウ！」

少年の意を汲んだのかはわからないが、一瞬だけ戸惑った様子を見せ、二本の太い足で立ち上がると、ワイバーンは高々と空を見上げて胸を張り、純白の美しい皮膜が張った翼を大きく広げて見せた。バサツと翼を広げた際に、一瞬だけ暴風が周囲に吹き荒れる。

「……………おお、おおー！　すげえ！　マジスゲー！」

少年は目の前にいるワイバーンに、我を忘れて感嘆の声をあげる。その大きさは五階建てのビル程もあるうか、広げられた翼のせいで、少年の周囲には大きく影が差している。

何より逆光で陽の光を背負った姿は、ゲームの映像など比較にならないほど、雄雄しく白い体躯と相まって、神々しささえ漂っていた。

少年はすげえ以上の感想が言えなかった。目の前にいる存在が大きすぎて、そして、その姿があまりにも美し過ぎて、油断をすれば目から涙が零れそうになる。

初めての経験だった。本当の感動というものを感じたのは……

「キューキュー……………？」

時間を忘れて見入っている少年に、ワイバーンはもういい？　と言う表情で問い掛けるが、我を忘れてしまっている少年には届きそうもなかった。

「だから…………俺が悪かったって…………機嫌直してくれよ…………」
「ギョッギョッ！」

あれから一時間近くも同じポーズを取らされ続けたワイバーンの機嫌は、かなり悪くなっていた。

それはそうだ。翼を広げたままだったせいで、時折吹く風をもろに受けてよろめくのを、バランス取りながら、一時間も耐えたのだから、その体に受けた疲労は相当なものだろう。

今は疲れたように地面に体を伏せさせ、少年から顔を背けている。それでも、少年の下から飛び去ろうとしないところを見ると、嫌われてはいない事に、少年はホッと胸を撫で下ろす。

「名前。そう名前を考えたからさ！ 機嫌直せって……」

「キュ……？ ……っ！ ギュイ！」

少年の言葉に、ワイバーンはチラリと一瞬視線を向けると、そこにはワイバーンの様子を見てニヤリと笑う少年の姿が映り、慌ててまた顔を背ける。

「自己紹介まだだったよな？ 俺の名前は睦^{ムツミ}。長谷川睦^{ハセガワムツミ}って言うんだ。んで、おまえの名前だけど……シロ！ シロでどうだ？」

「キュイ？ キュキュイ……ギユ！ キュギユウ！」

ワイバーン シロは頭をあげると睦に向かって顔を向けた。

そして、しばらく考えた様子を見せると、体を起して睦の周囲を飛び跳ねだした。

「どうって……その様子だと気に入った？」

「キュイ！ キュキュキュイ！」

体長十二〜三メートル、体重にいたってはトン単位の生き物が、自分の周りを跳び撥ねる姿は異様で、傍に居る者としては堪ったものではないが、睦はシロの喜ぶ姿に水を差すわけにもいかず、苦笑

を浮かべながら舞い立つ砂埃をジッと我慢するのだった。

「さて……これからどうしようかな……」

シロが喜び終わるのを待って、睦が口を開く。

さつきまで死の恐怖感からの開放や、シロの姿に圧倒されて忘れていたが、睦はここがどこだか……更にはこれからどうしていいのかもわからなかった。

ふとすれば不安感が押し寄せてくるが、シロのお陰でまだマシだといえる。

もし一人ぼっちだったならば、今頃は不安感から泣いていたからしれないだろう。

(いや……間違いなく泣いてたな。高校生にもなって迷子で泣くなんて情けないけど……)

「キュー……?」

シロが心配そうに見つめてくるが、睦は強がり笑顔を作って答えで見せる。

「せめて、鞆があつたらなあ。あんに弁当も入ってたし、携帯も……つてあつてもどうしようもないだろうけど……」

無いものねだりはしょうがないと思つてはいても、弁当だけは切実に欲しかった。まだ、昼をちょっと過ぎた時間だろうが、遅刻しそつだったので今朝はご飯を食べ損ねたのだ。

「キュー……キューイイ!」

睦がお腹を押さえる様子を見たワイバーンは、突然走りだしたと思ったら、そのまま二度三度と翼をはためかせる。

何度目かの力強い羽ばたきで、巨体をフワリと浮きあがらせると、大空へと上昇してゆく。

そして、気流を捕まえたのか。一気に加速するとあっという間に上空高く見えなくなった。その姿を見て、睦はその場にへたり込む。

「お……おい！　なんだよシロ！　俺を置いてくなよ！　おい……置いてくなよう……」

睦はシロの飛び去っていった方向に、恨みの視線を向けて途方に暮れた。

この世界で唯一の知り合いであるシロに、見捨てられて睦の目に涙が浮かぶ。

今は昼は過ぎて、既に陽は傾きつつある。例え今から人が居そうな所を探して歩き回っても、見つかりはしないだろう。

つまりは、睦はこの世界において、完全に孤立してしまった事を指していた。

「くっそ……あの馬鹿シロ……機嫌直したんじゃないのかよう……」

先程までの拗ねた姿を見せていたシロを思い出して、愚痴を零す。目にはうつすらと涙を浮かべ、睦は地面に膝を抱えて座り込んでしまった。

どれぐらいたっただろうか、シロが帰ってくるんじゃないかと、その場で待っていると……

オオオ……オン！　という犬とは少し違う遠吠えが、睦の耳

に響いてきた。

睦は遠吠えを聞くとビクリッと体を飛び跳ねさせた。

「……まさか……ここまでこない、よな？」

睦は犬と似た遠吠えに嫌な予感が走る。

その脳裏に浮かぶのは森の中で徒党を組んで狩りを行う動物
獰猛な狼の姿だ。

いくら、動物に懐かれやすい睦とはいえども、飢えた狼に懐かれ
るとは思えない。

地面から立ち上がると、遠吠えが聞こえた方向……遙か遠くに見
える森へと視線を向ける。

遙か遠いと言っても、睦は安心することが出来なかった。動物に
懐かれやすいだけで、まだ高校生なのだ。動物に対してそこまで詳
しい訳ではない。

ましてや、狼が狩りをする範囲などわかるはずがなかった。

「シロ……シロオ……！」

どンドン不安になって行き、この世界で唯一頼れそうな存在の名
前を呼び叫んでいた。

キキユーイ……

その時、睦の耳に聞きたかった声があったような気がする。

「シロー！」

再び、白く神々しいワイバーンの名前を呼びながら、睦は薄らと
夜闇に染まりつつある空へと視線を走らせた。

そこには月ではない白い影が、こちらへと飛んでくる姿が映る。

睦に近付いて来るにつれて白い影はその大きさを増して行き、その翼を広げる見知った姿を見た時、睦の心には言い知れぬ熱いものがこみ上げてきていた。

シロは睦のかなり手前の空中で翼をはばたかせ、急制動をかける。その翼が起した突風で、睦は草原の上を吹き飛ばされて転がっていったが、すぐさま立ち上がると、地上に降り立ったシロへと駆け出してゆく。

「シロ！ シロオ！ 馬鹿！ バカシロ！ 脅かすなよお……」

「キユ？ キキュウ？」

シロは涙を浮かべながら足へとしがみ付いてくる睦を、どうしていいか解らず困惑する。

「なんで……こんなことすんだよ……俺……捨てられちゃったかと思っただろ……」

「キユ？ キユキキュウ！」

睦が離れた事で、シロは足と翼を折り畳むと、翼についている鉤爪の指で掴んでいた物を地面へと落とす。

軽い音と重い音が響くと、地面に睦がこの世界で落とした通学鞆と、見知らぬ果実の生った太い枝が落ちていた。

鞆は持ち手の片方が千切れてはいたが、地面には叩き付けられていなかったのか、鞆そのものは無事であった。殆ど中身が入ってなかったと言う事もあるだろうが……

太い枝の方には甘く熟れた匂いを放つ洋梨みたいな果実が生っており、枝の根元は無残にも強い力で引き千切られていた。

その二つを見て、漸くシロが何をするために飛んでいったのかを

知った睦は、もう一度、今度は足ではなく地面に座っている体へと抱きついた。

「ごめん！ シロの事を馬鹿って言って……それと、ありがとうな？」

「……キユキ、キユイ」

シロは自分に抱きつく睦の顔に頭を寄せると、人を丸のみできそうなお口から舌をだして、睦の顔を舐める。

「……ははっ……やめろってえ……」

「キユイキユイ」

少しざらつく舌の感触に、こそばゆくなって舌から逃げようとするが、シロの体からは決して離れなかった。

そうやって、じゃれ合っているといつの間にか睦の心から不安感が舐め取られてしまったように、綺麗に消え去っていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9677x/>

飛んでも、わいばーん

2011年10月28日14時12分発行